

学童疎開や震災時 互いに支え



調印後、握手を交わす井川博・東灘区長、室谷弘文・魚崎町協議会会長、竹内敏朗・江府町長（前列左から）＝東灘区魚崎南町3

協定書はどちらかの地域で災害が発生した場合を想定し、「水や食料、生活必需品の提供」「被災児童生徒の受け入れ」など応援内容を明記。要請は電話で行う。「双方に連絡責任者を置く」と定めた。

両町の関係は1945年6月に始まった。魚崎

85年、かつて疎開した約60人が40年ぶりに同町を再訪し、町ぐるみで行き来するように。阪神・淡路大震災（1995年）、鳥取県西部地震（2000年）では互いに物資や義援金を届けた。「魚崎は南海トラフ、江府は50年先の島根原発が心配。共に備えが欠かせない」。江府町の竹内敏朗町長（63）が協定を持ち掛けたのは昨年秋だ。魚崎町協議会の室谷弘文会長（78）も快諾し、江府町制60周年に当たるこの日を調印式に選んだ。

災害応援協定締結 物資提供や被災者受け入れ

会場の魚崎会館には竹内町長、室谷会長のほか協議会のメンバーら約40人が集まった。井川博・東灘区長（68）が立会人を務めた。竹内町長が「万が一のときは力を合わせよう」と呼び掛けると、室谷会長も「阪神・淡路のとき、江府の皆さんががれきを乗り越えて物資を届けてくれたときの喜びは今も記憶に鮮明だ。気持ちの通じるお付き合いをしたい」と応じていた。

防災へ絆の力

東灘・魚崎地区と鳥取県江府町

戦時中の学童疎開が縁で、長年交流を続ける東灘区の魚崎町協議会と鳥取県江府町が1日、災害時の応援協定を結んだ。13年前に姉妹盟約書を交わしているが、南海トラフ巨大地震などに備え、救援物資の提供や被災者の受け入れなどを明文化した。

（黒川裕生）

学校名（ ） 年（ ）
名前（ ）

①交流が始まった時期、きっかけを具体的に書きましよう。

②今回の協定書で具体的に定められたことは何でしょう。該当する箇所を線で引きましよう。

③この記事を読んでどう思いましたか。感想を書きましよう。